

「私の修士論文」

福祉心理学専攻 渡邊 大輔 (平成 28 年度修了)

そもそも、私が研究計画書に書いた修士論文のタイトルは、訳の分からない、論文の作法を全く無視した無知の塊でした。入学時のガイダンスで、多くの先生方が失笑されたのを覚えています。そんな私ですが、無事に修士論文を書き終えるまでをここに簡単ではありますが記したいと思います。

1 年時には、福祉心理学研究演習と福祉心理学研究法特講でスクーリングの授業がありました。この 2 科目のスクーリングは、修士論文を執筆するにあたって非常に重要な学びを私に与えてくれたと思います。研究演習は論文を書くための基本的な考え方やその意義、研究法特講は具体的な統計処理や解析方法など、実践の理解を深めるという技術的な学びでした。研究法特講は選択科目になっていますが、出来る限り履修された方が良いかと思いません。私は論文執筆の後半になっても、何度も研究法の教科書や資料、ノートを見返し、気付きを得ることが出来ました。統計処理に自信がある方でも、復習するつもりで履修するのが良いのではないのでしょうか。

研究演習と研究指導は宇田川一夫先生にお願いしました。先生はまず、研究デザインを具体的にするために、公開されている論文を数多く読んでテーマを絞るように指示されました。そこで私は、自らの研究内容に近接すると思われる論文を図書館はもちろんのこと、インターネット上に公開されている論文で気になるものをプリントアウトし、来る日も来る日も読み漁りました。その数は少なく見積もっても 100 以上はあったでしょう。それは心理学領域に留まらず、経営学や経済学、社会学や看護学など、多岐に渡るものになりました。しかし、その中から自分の論文の変数を探し当てるまで、非常に長い時間が掛かってしまいました。自分が研究したいテーマを踏襲しつつ、それを心理学的変数として消化した上で、尚且つそれが論文として発表されていないものでなければならなかったからです。そこはとにかく論文を読み込んで、自分はどうしたいのかをひたすら自問自答するしかありませんでした。そんな日々を重ね、提出した論文のタイトルに落ち着いたのは第 1 回中間レジュメの直前でした。それでもギリギリまで試行錯誤を重ねたのは、推敲を深める意味でも良かったと思います。

統計処理にも苦労しました。処理作業自体は PC ですから問題ありませんが、変数の扱い方、理論の解釈は人間の仕事です。取り上げた変数と仮説の関わり方によって処理の仕方は異なってきますし、仮説ありきで考えると論理に破綻をきたすこともあります。そこで重要なのは、やはり統計の基本的理解です。そのために心理学研究法とは別に、市販の統計学の理論書を数冊購入し、その勉強もしました。それは今でも非常に役立っていると感じています。

質問紙の尺度は、先行研究で信頼性と妥当性が得られていると思われるものを使用しました。研究の内容によっては因子分析が仮説の検討に必要な場合があるかもしれませんが、私の研究ではそうではありませんでしたので、敢えて先人の功績に甘えさせて頂きました。

そんな感じで修士論文を進めていきましたが、決して順調に進んだ訳ではありません。心

が折れることもありましたが、退学を考えたこともないと言えば嘘になります。そんな私から論文執筆のコツをお伝えするとすれば、「既存の論文をとにかく数多く読む」「統計学の基本を正しく理解する」ということに尽きるのではないのでしょうか。とにかくどんなことがあっても諦めず、必ずやり遂げるという強い意志を持って欲しいと思います。

私の今後ですが、大学院で学んだ知識を基にして、研究を続けたいと思っています。直接今の仕事に関わるものではないかもしれませんが、大学院で学ぶということは、新たな可能性を創るということでもあります。その機会を作ってくれた宇田川一夫先生を始め、関わって頂いた全ての方々に最大級の感謝を申し上げます。ありがとうございました。